

## 清医趙淞陽に関する記録について

郭 秀梅

順天堂大学医学部医史学研究室／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室

第99回日本医史学会総会・学術大会にて「清医趙淞陽について」を発表したが、最近あらためて趙淞陽を調査する機会があった。そして従来の資料に対して新たな認識が生まれ、新資料も見いだした。よって前回の続報とする。

趙淞陽に関する資料は中国にほとんどなく、日本で下記の資料を現在までに見いだした。

『舶来書目』（宮内庁書陵部蔵，5234-40-102-151）。『唐医趙淞陽文録』（『文録』，修琴堂文庫蔵）。『趙淞陽医案』（『医案』，西尾市岩瀬文庫蔵，158-66）。『葉籠本草・万里神交』（『神交』，京大附属図書館富士川文庫，ヤ/78）。『唐馬乗方補遺』（『補遺』，享保時代の日中関係資料二所収）。『日本医譜』（日本医家伝記事典所収，日本内経医学会刊）。『傷寒論私撰』（杏雨書屋蔵，杏110）。『居家遠志』（国立国会図書館蔵，60-652）。『傷寒論文字攷』（早稲田大学図書館蔵，ヤ09-00499）。『大墨鴻壺集』（東京都立中央図書館蔵，加賀文庫5199）。

以上の資料に基づき、趙淞陽の来日経緯や3年近くの滞在中の活動がおおむねに明らかになった。前回、未発表の資料だけを紹介しよう。

『補遺』によると、享保9年（1724）、唐船主の高令聞は幕府の命に応じ、唐医を連れてくることを了承した。高氏は帰国後、趙淞陽を再三誘い、趙氏は自らの高齢を憂慮しつつも説得され、享保11年、高氏の船で長崎に渡来した。当初は長崎で享保12年11月までの予定だったので、1年間診療する約束だったらしい。来日後まもなく唐館を出て、市中での診療を始め、日々多忙のようだった。同13年春、趙氏は高令聞の商船が寄港したのを知り、同船での帰国許可を懇願した。しかし何らかの原因で滞在は享保14年8月28日まで延長され、3年間にわたり診療を行った。同年4月20日、オランダ人馬乗の病気を診たことが特記される。また趙氏の献上品に対し白銀20枚が下賜された。献上品が何だったかの記述はないが、たぶん書物であろう。ほかに薬種代として銀や銅が支払われた。さらに趙淞陽の甥の呉宿来に翌年の信牌が与えられた。幕府が今回の来日と交易に満足したためであり、これにより呉宿来が来年入港できることになった。

『文録』と『医案』についても概説しておく。二者の記載には重複と順次の違いがある。

『文録』巻頭には「趙天潢，字淞陽，号玉峯道人，南京姑蘇人也。日本享保二十乙亥歲，得公免偶肥之長崎為人行医，在崎三歲歸郷」と記す。奥書に「天明七丁未霜月念三日，得今宮郷鶴橋元執医生伝本，殺青成。六十七叟屯倉子越□安録」とある。つまり1787年11月23日の筆写で、筆写者不明だが、三宅意安の号は屯倉子である。ただし三宅意安の生卒年が不詳につき、この屯倉子か否かは確認できない。これは趙淞陽が帰国した半世紀以上後の筆写ゆえ、趙氏の事跡が医界に長く伝承されていたと推測できる。

『医案』は岩瀬文庫所蔵で、「原装共紙表紙（無野）に覆表紙（黄葉色，卍繫空押）を付す。版心下部に「読書室蔵」とある左右双辺10行墨刷野紙。1行20字。白文」と著録される。

二書の内容は三つに大別される。多いのは患者の病状・診断・薬方・治療経過の具体的記述で、また医学に関する書や理論的見解の記述がある。さらに趙淞陽の請願書も含まれる。ただし『文録』にある「問単」の項目は『医案』になかった。

趙淞陽は書物や薬を将来し、市中で医療を3年つとめた。『文録』『医案』『神交』や詩などさまざまな業績を残し、中日歴史上の美談を作ったと言えよう。彼が長崎でよい思い出をつくったのは、『大墨鴻壺集』にある帰国後揮毫の詩文二通で裏付けられる。